
MELODY ~また逢う日まで~

水月鏡花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M E L O D Y ～また逢う日まで～

【コード】

N 6 9 2 0 P

【作者名】

水月鏡花

【あらすじ】

蘭をかばって記憶をなくしてしまった新一。

『僕は誰なんですか？』

思い出せない記憶。

『僕はココにいちやいけないんだ』

『みんなが求めているのは“僕”じゃないんだ』

積もっていく罪悪感。

複雑に絡み合う糸。

新一と蘭の運命は――

FILE・0 エガオで――（前書き）

残酷な描写が出てくるかもですので、苦手な方は読まないでください。

FILE・0 エガオで――

君と出逢ったあの日

オレはキミに恋い焦がれ

ずっとキミを想っていました

そして

想い、伝えて あの花い空の下で

「ずっと一緒」 そう誓ったのに

約束ってどうしてこんなに脆いのでしょうか

2人 傷つくくらいなら

キミとの思い出に終止符を打ち

エガオで

さよならを告げましょう

さよなら・・・世界一大切なキミ

涙は流さないよ 『エガオで』 って約束したから

だからキミも泣かないで？

キミの泣き顔はもう見たくないから――

キミとオレの最後の想い出が

2人のエガオでありますように・

FILE・0 エガオで――（後書き）

とてもわかりにくいと思いますが、じきに分かります。

たぶん、次の話くらいで・・・（早っ

まあそれまでのお楽しみということぞ！

水月鏡花

FILE・1 終わりの始まり

「新一！遅いよー！」

「悪い悪い・・・寝坊しちまってよ・・・」

「あ、信号が！」

そう言われて信号の方をしてみると青い光がチカチカとしていた

「早く渡っちゃおうー！」

「ああ」

昔、オレがまだコナンだった頃、誰かに『歩行者用の信号が点滅しているのは車の信号の黄色と同じなんだよ』って言われた気がするでももうすでに蘭は走り出していた

「新一ーっ！早くー」

「あ、おうー！」

そんなやりとりをしているうちに信号が赤になってしまった

ゴオオオオ

道路中に大きな音が響き渡る

気がつくと蘭の方に大きな運送業者のトラックが迫っていた

「蘭っ！危ない！」

そう叫んだときにはもう体が蘭の方に向かっていた

「あ……あ……」

怯えて動けない蘭

「らぁーん」

そんな蘭を突き飛ばしてトラックから遠ざけた
と同時に、オレの体が宙に舞った

「新一いーっ！！」

宙へと舞った体はオレに考える余地も与えず地面へと真っ逆さまに
落ちていった

そのとき蘭の叫び声が聞こえた気がする
でも、そう思ったときにはもう地面まで10？もなかった

ドシャツという音と共にオレの体からは紅い鮮血がドクドクと流れ
出ていた

「誰かつ！救急車を呼んで下さいっ！」

蘭の慌てふためく声

救急車？

あ、そうか……

オレ、蘭をかばって車にはねられたんだ

そのままで考えると意識が遠のいた

FILE・1 終わりの始まり（後書き）

新一、カッコイイ・・・

蘭守りましたよ？

さすがです！

次回、新一の記憶が――

これ以上言わな―い！

水月鏡花

FILE・2 失った記憶(前書き)

長らくお待たせいたしました。

やっと更新できました！

待っていてくれた方々、ありがとうございます！

FILE・2 失った記憶

「新一！起きてよ……」

誰かの呼ぶ声がある

「んっ……」

「新一！目が覚めたの！！」

目を開けるとそこは真っ白な場所だった

そしてほのかに香る薬品の匂い

それと、女の子

誰……？

「あなたは……誰なんですか？シンイチって、誰ですか？」

「え……？嘘……嘘でしょ？新一が私のこと……分からないなんて……」

僕と同じくらいの年の女の子は、そう言っただけ涙を零した

ねえ、どうして泣いているの？

僕は、そしてあなたは誰なんですか？

教えて……

「蘭！入るよ」

ドアの向こうから別の女の人の声がする

「園子？入って……」

「蘭！？」

園子と呼ばれた女の子は、ガラツと勢いよくドアを開けるとさっきの女の子——蘭さんに駆け寄った

「蘭、どうしたのよ！って新一君！？あなたがやったの！？」

イキナリ話しかけてくる

さっきからシンイチシンイチって——

シンイチって誰？

僕のこと？

知らないよ

何も覚えてない

「新一は……悪くないの……ただ、記憶が……ない……だ
け……」

「嘘……じゃあ蘭のことも……」

蘭さんが肩を震わせながら頷いた

記憶がないってどういうこと？

いったい何があったの

分からない

ナニモワカラナイヨ――

「蘭、ちょっと待ってて……おじ様たちを呼んでくる」

「うん……」

そう言うと園子さんは部屋を出て行った

「ねえ新一……ホントに何も……覚えてないの……？」

「すみません……何も……分からないんです……自分が誰なのか……そして、あなたのことも」

「そっか……」

蘭さんはとても悲しそうな表情でいった

僕のせい？

心の奥に黒い霧がかかった気がした

FILE・2 失った記憶（後書き）

展開が急でした。

なんとお詫びしたらいいか・・・

次こそは気をつけます・・・

水月鏡花

FILE・3 "工藤新一"の真実 (前書き)

3件ものお気に入り登録、ありがとうございました。
これからも応援、よろしくお願いします。

FILE・3 "工藤新一"の真実

「蘭！新一は……」

「蘭……」

園子さんが出て行つて数分後、蘭さんのお父さん・お母さん・園子さんが医師と共に病室へとやってきた。

「工藤君、大丈夫かい？」

さつき来た医師がそう聞いてくる。

「はい、体の方は……でも」

「記憶が……ないんだね？」

「はい……」

ここにいる医師をのぞいた誰を見ても、誰一人思い出せなかった。

「自分が誰だか、分かるかい？」

「いいえ……」

そして、自分のことさえも

「じゃあ教えてあげなきゃね……」

「私が」

蘭さんが名乗り出た

「じゃあ蘭ちゃん、お願いできるかな？」

「はい・・・」

そう言うと蘭さんは僕の方へくると、ベットのそばにあつたイスに座った。

「あなたの名前は、工藤新一。探偵なの。今じゃ日本警察の救世主と呼ばれるくらいの腕なのよ」

「僕が・・・探偵？」

信じられなかった。

日本警察の救世主とまで呼ばれてたなんて・・・

「そう。そしてシャーロック・ホームズが大好きで、いつもホームズの話をしていたわ」

シャーロック・ホームズ・・・

なんだか懐かしかった。

「で、サッカーもプロ級、勉強もトップで大バカ推理の助な私の幼なじみ」

大バカ推理の助？

「それとね新一のお父さんは推理小説家で、お母さんは元大女優なのよ」

「推理小説家と大女優・・・」

どこかで聞いたような組み合わせだった。

馴れ初めなんか、きつと聞かなくなつて分かるくらいにベタだろう・・・

「そうよ・・・あつそうだ！明日新一の家にみんなで行こうよ！何か思い出すかもしれないし！！」

「でも・・・」

蘭さんのお母さんが心配そうな顔を見ると、医師が言った。

「そのくらいなら大丈夫です。無理をさせなければ」

「ほら！ねえ、行こうよ」

「・・・蘭がそこまでいうなら・・・ねえ、あなた？」

「ああ・・・」

「じゃあ明日、午前9時にここに集合ね！」

蘭さんがそう言うと、みんな一斉に頷いた。

そして、蘭さんを残して帰って行った。

「新一、大丈夫？」

「あ、はい大丈夫です・・・迷惑掛けてすみません・・・」

「いいのいいの！じゃあ私も帰るね」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあまた明日ね！」

そう言っつて蘭さんも、病室をあとにした。

病室に静寂が訪れた

いろいろなことがあって疲れたはずなのに、横になっても全然眠れなかった。

僕が探偵だったとか、警察の救世主だったとか、信じがたいことをたくさん聞いたせいだろうか？

いきなり信じるなんていわれたって無理だった。

”工藤新一”の現実^{せいかう}は、あまりにも普通とはかけ離れていた。

結局一睡も出来ずに朝を迎えた。

後書きをもつと盛り上げるため、ゲストの方をお呼びしました！

哀「それだけのために私が呼ばれたわけ？」

いや、だって哀ちゃんまだ本編に出てないじゃない？

哀「ええ」

だから

哀「あらそう・・・で？私はいつ出れるのかしら？」

知らない

哀「それで済むと思ってるの？バカな小説家さん・・・」

ごめんなさい！謝るから落ち着いて！ね？

哀「ね？じゃないわよ！」

哀ちゃんが怒っちゃったため、強制終了です。

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

哀「絶対許さない！！」

水月鏡花

FILE・4 シャーロック・ホームズ(前書き)

久々すぎる投稿で申し訳ありません！
これからは頑張ります！

FILE・4 シャーロック・ホームズ

「みんな、準備できた？」

今日は僕が住んでいたという家にみんなで行く日
昨日眠れなくて徹夜したせいだろうか？
頭の回転が鈍い

「私はOK！」

「私もよ」

「俺もだ」

園子さん・英理さん・小五郎さんが口々にそう言った

「新一は？」

「あ、はい大丈夫です」

「じゃあ行こうか！」

これから僕の家に行くんだと思うと、なんか少し緊張した

く工藤邸く

「ここが新一の家だよ！」

「……」

とても大きかった

まず、大きな門がどっしりと構えていて、その奥にキレイな庭と洋風の大きな屋敷があった

ここが、”新一”の家……

「どうしたの？中に入る？」

「あ、はい。今行きます」

中に入るとそこは別世界のようだった。

天井へと伸びる本棚にはぎっしりと本が詰まっていた。

「本が……」

「あ、それ？それはね、あなたのお父さんのなのよ。ほら、あなたのお父さん、推理小説家でしょ？」

「あ、そうなんですか……」

推理小説家、ということはきっとここにある本は全部推理小説……

推理……

あ、そういえば……

「あのー蘭さん？シャーロック・ホームズはこの棚に入ってます

か？」

「え、ホームズ？ちょっと待ってて」

”僕”はどうやらホームズが好きだったらしいから、読めば何か思
い出すかも知れない。

「はい、あつたよ！」

「ありがとうございます」

僕は蘭さんから本を受け取ると空いているいすに座って読み始めた。

「にしてもデカイ家だなあ・・・」

「そうねえ・・・」

横では蘭さんの両親が何か言っていた。

でも僕はそれを聞き取れないくらいに集中して読んでいた。

しかし、

「っ、痛っ！」

「どうしたの新一！」

しばらく読んだところで、頭が猛烈に痛くなった。

「痛い、痛い、痛い、痛いっ！」

痛くて痛くて頭が割れそうだった。

「園子！救急車を呼んで！」

「分かった！」

それからしばらくして救急車の音が聞こえ始めたと同時に、

僕は意識を手放した。

FILE・4 シャーロック・ホームズ（後書き）

どうでしたでしょうか？

いつもより少し長めですが、読んでくださってありがとうございます！

感想いただけると嬉しいです！

水月鏡花

FILE・5 戻りかけた記憶（前書き）

久々の投稿ですみません！！

FILE・5 戻りかけた記憶

「　　つと記憶を　　したから　　よう」

「　　ですか。　　ごぞいます」

かすかに聞こえた声で僕は目を覚ました。

「つ……」

「新一！」

「蘭さん……」

見慣れた白い壁と鼻をかすめる薬品の香り。

「目が覚めたみたいだね」

「あ、はい」

「よかった」

そういつて医師がほほ笑む。

にしても僕はどうしてここに？

確か、僕の家に行って、本を読んで、それで……

「先生、僕は一体どうしたんですか？」

「ああ、そつだ話さなくちゃね」

話を聞くとどうやら僕はホームズを読んで何か思い出しかけたらしい。
でも思い出すのを脳が拒んで、それで頭が割れそうにいたくなつたと
言うことだそうだ。

「そうですか……」

「でも心配はいらないよ。今のところ脳に異変はないからね」
「はい。でも……」

「君の言いたいことは分かる。記憶を取り戻したいんだろ？」

「……」

その通りだった。

今のままでは何も出来ないし、それに、蘭さん達に心配をかけるばかりだ。

「僕だつて君に思い出してほしいさ。でも、無理はさせたくないんだ。」

「言いたいこと、分かるよね？」

「……はい……」

先生の言いたいことはよく分かるし、もっともだと思つ。

「でも・・・それでも・・・」

「僕は記憶を取り戻したいんです」

FILE・5 戻りかけた記憶（後書き）

短いですね。

この話は”シンイチ”の決意表明みたいな感じですが、でも、記憶が戻るかどうかはまだヒミツです（笑）

水月鏡花

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6920p/>

MELODY ~また逢う日まで~

2011年10月10日14時02分発行